【佳作】

「忘れられない日」

七飯町立七飯中学校
３年　杉本　侑大

「北方領土問題」それは、日本の大きな領土問題の一つである。日本固有の島々である択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島が、今日までロシア連邦によって不法に占拠されている。第二次世界大戦の終わり間際、ソビエト連邦による非道な侵略で占領され、ロシア連邦に引き継がれてから現在に至るまで、日本の領土返還要求に対して、ロシアは受け入れる様子が見られないばかりか、より一層強固な姿勢を取ろうとしている。なぜ、世界で最も広い領土を持つロシアが、この小さな島々にこだわるのだろうか。

調べてみると、ロシアが返還に応じない理由は三つあった。

一つは海洋資源である。ロシアの北側の北極海は冬になると凍ってしまう。だから、太平洋やオホーツク海などの広い範囲に船を出すことができる北方領土は貴重な領地なのだ。ロシアにとって、豊かな漁場で操業をするための重要な拠点になってしまっているから、返還はしたくないのである。

二つめは日本が結んだ「日米安全保障条約」である。もし、日本に北方領土を引き渡したら、条約に基づいて、米軍の駐留が可能になってしまう。その動きを警戒しているからだ。

三つめは、北方領土のロシア化である。現在、北方四島には約一万八千人以上のロシア人が生活している。ロシア軍も駐留している。その住民たちを無理矢理ロシアに帰らせるわけにはいかないため、とても慎重に対応していく必要がある。

これらの問題点は非常に複雑に絡み合っていて、また、その時々の国同士の交渉状況もあり、なかなか解決に至らないのが現実だ。どうすれば、この問題は解決に近付いていくのだろう。

まずは、領土問題の重大さを両国民に広く知ってもらうことだ。始まりからもう七〇年以上もたっているが、双方に正しい状況を理解してもらうこと、関心を持ってもらうことが必要だと思う。元島民の声に耳を傾けながら、ロシアがどのように考えているのか、どこに解決の糸口があるのかをさがしていく。その行動を起こすことがこの問題の解決へとつながっていくのではないだろうか。

そして一番大切なのは、決してどちらかに偏らず、「共存」という道を探していくことではないだろうか。日本としても、占領前のような、固有の領土としての返還を求めるのは当然だ。しかし、そこに暮らすロシア国民をないがしろにするやり方は、また同じ争いを生むだけだ。それでは何も変わらない。両国民一人一人が、お互いの立場を思いやり、正しく理解していく努力を続けていけば、この問題の解決は必ず前進していくことだろう。

国民として行動できることの一つに署名運動がある。これは国民の北方領土返還への意志を直接表明することのできる手段だ。総署名数は令和四年三月末の段階で約九三〇〇万人に達している。それだけの人たちが北方領土の返還と平和的解決を望んでいるということが、政治的交渉の場で必ず後押しになってくれるはずである。

この文を書きながら、どんな小さなことでも正しい知識を持つこと、自分の国さえ良ければいいという勝手な考え方をしないこと、国民の声が大きな力を発揮することを学ぶことができた。その力が長年の領土問題を解決し、両国を明るい未来への橋渡しになれば、こんなに素晴らしいことはないだろう。